（三）奈良本・大田の大蟹

奈良本の熱川小学校の先あたりは、大田と呼ばれています。ここには「蟹が森」といわれた森があり、この森には蟹が祀られていました。ここに蟹が祀られていたことについては、次のようなお話が伝わっています。

昔、大田がまだ池だったころのお話です。池にたまった水は、入赤川に流れ、村の田んぼの稲作りに使われていました。この入赤川には、「大田の大蟹」といって、二十畳ぐらいの大きな甲羅をした蟹が住んでいました。

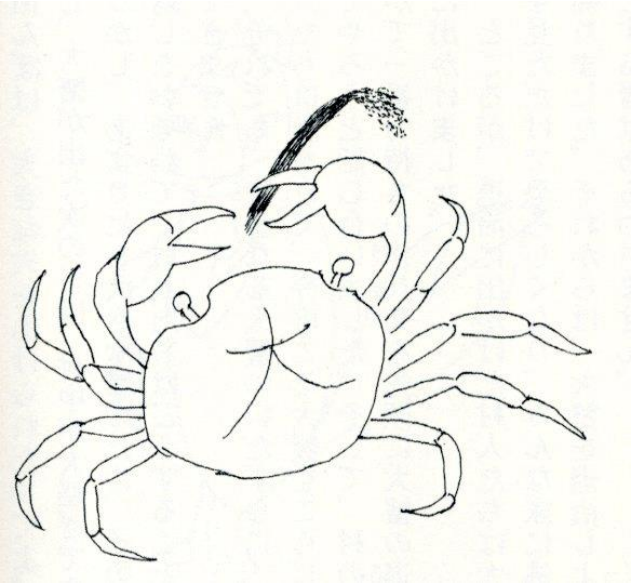
ふだんは見ることがない大蟹でしたが、稲が実る秋の夕ぐれになるとどこからかやって来ます。あらわれた大蟹は、村人たちが作った稲を大きなはさみでばっさばっさと切り倒してしまうのです。ときには、田んぼに大きな穴をあけるので、稲作りができなくなることもありました。「ゆうべ大蟹が出て、吾作さんちの稲はぜんぶ切られてしまったそうだ。」、「となりの田んぼは、大きな穴をあけられたってよ。」と、大蟹が出た次の日は、村中が大騒ぎです。しかし、あまりにも大きな蟹のため、その仕返しをおそれて、村人たちはどうすることもできません。それでも、度重なる大蟹のいたずらに村人たちは腹を立て、今度こそ大蟹をこらしめてやろうと話し合いました。そして、村のなかで一番力持ちの作兵衛を先頭に大蟹の退治に出かけました。

ところが、退治に出かけた村人たちは大蟹を見ただけで恐ろしくなり、みんな家に逃げ帰りました。それからは、大蟹を退治しようとする者はあらわれません。村人たちの困った様子を見た村の長である太郎左衛門は、大蟹を退治できないかと悩んでいました。太郎左衛門は、しばらく考えているとすっくと立ち上がり、家に伝わる宝である弓矢を持って大田の池へ出かけていきました。

太郎左衛門は、池に着くと木のかげにかくれ、大蟹を待ちました。そのうちに、なまぐ

さいにおいとザワザワという音とともに大蟹があらわれました。太郎左衛門は、「今度こそ、村人たちのために、大蟹を退治してやるぞ。」と、大蟹をめがけ、力の限り弓を引きしぼり矢を引き放ちました。矢はみごとに蟹の甲羅に突き刺さり、二本目の矢も突き刺さりました。矢が刺さった大蟹は、夜明けまで苦しみ、ズシンと音を立てて倒れると死んでしまいました。

次の朝、ゆうべ大きな音がした大田の池に来てみた村人たちは、みんなびっくりしました。あの憎(にく)い大蟹が池にたおれて死んでいるではありませんか。それを見て、驚(おどろ)いて腰(こし)を抜かす者までいました。

ところが、大蟹のまわりには何百、何千というたくさんの子蟹(こがに)がむらがり、大蟹の死を悲(かな)しんでいました。村人のなかには、まだ大蟹をたたこうとする者もいましたが、太郎左衛門は「憎い蟹とはいえ、子蟹からこんなに慕(した)われているのを見るとかわいそうだ。もう死んでいるのだから、たたくのはやめよう。」といって、やめさせました。

それから、太郎左衛門と村人たちは、森に蟹の祠(ほこら)を建てて蟹を祀り、そこを「蟹が森」と呼びました。また、奈良本の人たちは、かわいそうな子蟹のことを思い、今でも子蟹をとって食べないとのことです。